哲學研究　第百八十八號　第十六卷第十一號

「一般」と云ふ言葉の意味について

高坂正顯

B

意識一般は如何なる意味に於て一般なのであらうか。意識一般の有つ一般は如何なる領域に於ける一般なのであらうか。それは具體的なる普遍であらうか。或は抽象的なる普遍であらうか。

それは抽象的なる普遍であると言はれなければならないであらう。しかも不思議にもそれは自らの内に最も具體的なる普遍を包含し得る抽象的普遍なのである。ある意味に於ては最も具體的なる普遍とも言ひ得べき經驗一般の世界を自らの内に成立せしめ得る抽象的普遍なのである。具體的普遍を内に包む抽象的普遍なの

である。それは正に一箇の謎を我々に提供するものに他ならない。如何にしてかゝる謎が成立するであらうか。またかゝる謎は解決の道を有するであらうか。自然の世界の根柢は深く自由の世界に繋がれてゐる。意識一般は自然の世界より自由の世界への掛橋である。もし意識一般に具體的普遍を包む抽象的普遍と云ふ奇怪な性格が見出されたならば、その由來する處はこゝに存するのでなければならないであらう。はたしてしかるか。

意識一般と云ふ言葉は、純粹理性批判の第一版には見出されず、プロレゴメナ以降に見出されるのである事は周知の事である。しかしながらその事は、第一版に於ては意識一般に對應する如何なる概念も存しなかつたと云ふ事の證據にはならない。我々は意識一般に對應し、ほゞ同じ役目を演じた言葉として、確かに、超越的意識 das transzendentale Bewusstsein なる言葉を指摘し得るのである。それ故我々は意識一般が如何なる意味の一般であるかを明にするに先だつて、超越的意識とは如何なる意識であるか、如何なる構造を有するか、もし又超越的意識に關して、何等かの一般性が見出され得るならば、その一般性は如何なる點に成立するかを明にしなければならな

いであらう。けだし此の事は意識一般が單に超越的意識として既に如何なる一般性を有してゐたかを明にする事となるからである。かく超越的意識の意味を規定した後、次に、我々はそれが特に意識一般と呼ばれる事によつて如何なる意味の擴張をその一般性に關して獲得するかを明にしよう。かくして意識一般の構造從つて又その一般性の特質が明にされる事となるであらう。

超越的意識とは如何なる意識であるか。カントが超越的意識と云ふ言葉を用ひてゐる箇處 Alles empirische Bewusstsein hat aber eine notwendige Beziehung auf ein transzendentales, (vor aller besondern Erfahrung vorhergehendes) Bewussisein, nämlich das Bewusstsein meiner Selbst als die ursprüngliche Apperzeption. ..... Es ist aber nicht aus der Acht zu lassen, dass die blosse Vorstellung Ich in Beziehung auf alle anderen, (deren kollektive Einheit sie möglich macht), das transzendentale Bewusstsein sei. A. S. 117. Anmerk. より考ふれば、其は根源的統覺、卽ち「單なる自我の表象」であつて、(1)凡ゆる經驗的意識に先立ち、(2)その綜合的統一を可能ならしむるものである。卽ち第一に其はカントが das stehende und bleibende Ich (der reinen Apperzeption) A. S. 123. と呼ぶ不動の自我であり、完全なる自己同一 die durchgängige Identität seiner selbst A. S. 116. を有する、一つの意識 ein Bewusstsein A. S. 122. であつたの

である。否それは更に唯一の自覺 ein einiges Selbstbewusstsein A. S. 117 Anmerk. であるのである。かゝる根源的なる統覺としてそれはあらゆる經驗的意識に先立つたのである。しかして第二にその根源的なる統覺は單にあらゆる經驗的意識に先立つのみでなく、更にあらゆる經驗的意識を統一するものであり、die objektive Einheit alles (empirischen) Bewusstseins in einem Bewusstsein (der ursprünglichen Apperzeption) A. S. 123. 凡ゆる意識を包括する純粹統覺である。 ...alles Bewusstsein gehört...zu einer allbefassenden reinen Apperzeption A.S 123 卽ちそれはあらゆる意識を統一し、包括する意味に於て普遍的なる意識の統一 durchgängige und allgemeine, mithin notwendige Einheit des Bewusstseins... A. S. 112. であり全體的なる自覺 das ganze mögliche Selbstbewusstsein A. S 113 である。かくて超越的意識は全體的なる自覺である事を明にした。しからばこゝに普遍的、汎通的統一と云ひ又全體的なる自覺と云ふ場合、その普遍性はいづこに成立してゐるのであらうか。

それはあらゆる經驗的意識の包括ではあるけれど、しかしてその意味に於て普遍的であるけれども、まづ(1)注意さるべき事は、こゝにあらゆる經驗的意識の包括と呼ばれてゐるものが、我の經驗的意識、汝の、彼の……彼等の經驗的意識の包括ではない

事である。種々なる個人の經驗的意識の包括、從つて群集的なる意識の包括ではなく、寧ろ經驗的なる我の意識をその與へられ得べき種々なる內容の可能的なる極限にまで擴大したものにすぎない事である。經驗的なる我の意識の總體はもはや經驗的なる意識ではなく、却て超越的なる意識であり、變化的斷續的なる經驗的統覺に對して普遍的汎通的、自己同一的なる統覺の意味を有つのである。かくて超越的意識はあらゆる經驗的意識の總體として一般的である。しかしながら次に(2)それと關聯して超越的意識はあらゆる意識の統一であるが故に、カントが第一版の演繹に於て區別して論じた直觀に於ける覺知の綜合、想像力に於ける再生の綜合、概念に於ける再認の綜合は各自獨立の能力ではなくして、むしろ超越的意識の三つの活動の階段であり、「共通なる結合の能力」gemeinschaftliche Funktion des Gemüths, es [das Mannigfaltige] in einer Vorstellung zu verbinden A. S. 109. の種々なる程度に於ける發現に他ならないのである。從つて超越的意識とは種々なる意識の作用を一つに集める一つの能力 ein Vermögen A. S. 117. Anmerk. であり、言はゞその統一ある全體であるであらう。超越的意識が das ganze Selbstbewusstsein と云はれ得るならば、それはかくの如き構造を有さなければならない。

以上我々は簡單に第一版の演繹論に於ける超越的意識なるものがいかなる構造を有つかを明にした。卽ちそれはまづあらゆる經驗的意識の全體的統一として一般的であり、又次に、種々なる認識能力を綜合し、統一する意味に於ても一般的であつたのである。たゞ注意さるべき事は、そこには未だ種々なる個人的意識に對應する一般と云ふ意味は見出され得ない事である。この點について意識一般と云ふ言葉は何等かの補充を含みはしないであらうか。

しからば意識一般とは如何なるものであらうか。如何なる構造を有するであらうか。今や我々は意識一般の意味を明にすべき場合となつたのであるが、それに際して、まづ意識一般が超越的意識と同一の構造を有する事を指摘し、次に意識一般の特殊なる意味に論及するのが適當であらう。

我々は一つの假定から出發しよう。それは、意識一般は經驗界構成の地盤として、經驗一般に對應するものであると云ふ事である。さてあらゆる經驗一般の可能の根據を形成するものが意識一般であるならば、意識一般には少くとも經驗一般に於けると同樣の「一般」が含まれてゐなければならない。卽ち叡知的なるもの一般を最

深の地盤として、ついで純粋なるもの一般の層を重ね、遂に、經驗的なるもの一般にまで發展する「一般」の構造の關聯を示さなければならない。しかしながら意識一般に對して、はたして、かゝる構造を假定する事は許され得るであらうか。もしかくの如き構造を主張し得たならば、それは又逆に、意識一般が經驗一般に對應するであらうとの前提を證明する事にもなるのであるが、それは許し得べき假定であらうか。

まづ私は「我考ふ」がすべての私の表象に伴ひ得なければならない、とカントが語るその我の意味を考へて見よう。それは「我考ふ」と云ふ表現によつて自ら示される如く單に考ふるのみの我であつて、直觀する我ではない。それは同時に「我直觀す」と云ふ事を許さゞる單に思惟するのみの我である。もしそれが思惟すると同時に直觀し得るものであるならば、より正しく言へば、思惟する事が同時に直觀する事を意味する如きものならば、それはカントによつて嚴しく退けられた知的直觀或は直觀的悟性であつて、むしろ神にのみ屬すべきもの、しかして人間の認識の基礎をなすと云ふ「我考ふ」の我ではない。その事は反復してカントが我々に注意する處である。*

*例へば Ein Verstand, in welchem durch das Selbstbewusstsein zugleich alles Mannigfaltige gegeben würde, würde anschauen; der unsere kann nur *denken* und muss in den Sinnen Anschauung suchen. Tr. Deduktion § 17 と語り、次の節に於て直觀する悟性にとつては演繹の必要はなく之に反して我々の悟性は單に思惟するのみで直觀するものでなき事を注意してゐる（……der

menschliche Verstand, der bloss denkt, nicht anschaut, §18)。而して更に第二十一節に於て Denn wollte ich mir einen Verstand denken, der selbst anschauete, (wie etwa einen göttlichen, der nicht gegebene Gegenstände sich vorstellete, sondern durch dessen Vorstellung die Gegenstände selbst zugleich gegeben oder hervorgebracht würden), so ……かゝる悟性は神的悟性であると言ふのである。同樣の注意を我々に與へてゐる揚所は XXXIX Anmerk. S. 68, 159 及び Paralogismen の諸處。

かくて「我考ふ」の我は直觀的なるすべてを奪はれた我として規定された。それは單に思惟するのみのむしろ單に論理的なる我でなければならない。カントが Das Bewusstsein meiner selbst in der Vorstellung *Ich* ist gar keine Anschauung, sondern eine bloss *intellektuelle* Vorstellung der Selbsttätigkeit eines denkenden Subjekts. S. 278 我の自覺は直觀ではなくして單に知的な表象に過ぎない、と云ふのもその意味であらう。それは「あらゆる思惟の內に含まれてをり、或は少くとも含まれ得べき單なる意識」das blosse Bewusstsein, welches in allem Denken enthalten ist oder wenigstens sein kann, S. 812 卽ち單に論理的なる意識に止まるのである。從つてかゝる「我考ふ」の我にとつて尙ほ「我在り」を語り得るとしても、それは思惟としてのあり方を語るのみで、存在としてのあり方を語るのではない。主觀としての又思惟としての存在を假りに有するとしても、客觀として、又對象として、認識し得べき存在の意味を有さない。Freilich ist die Vorstellung «Ich bin», die das Bewusstsein ausdrückt, welches alles Denken begleiten kann, das, was unmittelbar

die Existenz eines Subjekts in sich schliesst, aber noch keine Erkenntnis desselben,……S. 277. Denken され得るも Erkennen され得ないのである。しかしながらそれは決して單なる假象ではない(viel weniger blosser Schein) S. 157. しからずして「私の存在の規定」(die Bestimmung meines Daseins) S. 157. なのである。それによつて「いかに私が自らに現象したか、も知り得ないし、又いかに私が自らに於てあるかも知り得ないがしかし、たゞ私がある事を知り得るのである……nicht wie ich mir erscheine, noch wie ich an mir selbst bin, sondern dass ich bin S. 157 それは思惟の作用を示し、思惟の自發性を表すのである。「しかも此の自發性の故に私は私を叡知と呼ぶのである」Doch macht diese Spontaneität, dass ich mich Intelligenz nenne, S. 158. Anmerk.

＊同じ意味を語る場所としてS. 305-6, 322 Anmerk.

かくて以上によつて私達は「我考ふ」の我が叡知的なるものである事を明にしたであらう。少くともそれを私達はまづ叡知的なるものとして把握しなければならないのである。しかしながら叡知的なるものとは、カントによつて感性の對象に於て、それ自らは現象ならざるものを呼ぶと定義された。Ich nenne dasjenige an einem Gegenstande der Sinne, was selbst nicht Erscheinung ist, intelligibel. S. 566. ＊從つて叡知的なるも

のについて語り得るためには、まづ叡知的なるものが、その内よりして見出さるべき感性的なるものが、方法的には先だつて與へられてゐなければならない。しからば叡知的なる我に對して、感性的なる我とは何であらうか。

＊カントはノウメナについても同じき規定を與へてゐる。Wenn wir unter Noumenon ein Ding verstehen, sofern es nicht Objekt unserer sinnlichen Anschauung ist, indem wir von unserer Anschauungsart desselben abstrahieren, so ist dieses ein Noumenon im negativen Verstande. 卽ち我々にとつて可能なノウメノンは消極的なノウメノンであつて之に對して積極的なノウメノンは知的直觀の對象として我々から遠ざけられてゐる。S. 307.

云ふまでもなくそれは内部知覺に於ける我でなければならないであらう。内感 innerer Sinn としての我であるべきであらう。しからば内感とは如何なる構造を有するものであらうか。我々は内感について少くとも二つの異る規定を區別しなければならないものゝ如くである。一つは内感をばカントが經驗的統覺と同一視する場合に見らるゝものであり(心理的な我に關はる)、他の一つは凡そ我々に與へらるゝ限りの表象は悉く内感の形式的制約の下に立つと規定さるゝ場合に見らるゝものである(對象認識に關はる)。前者は既にカントが時間を規定して「時間は内感、卽ち、我々自ら及び我々の内的狀態の直觀の形式に外ならない」K.d. r. V. S. 49 と語つた場合に於て認められ、さらに内感をば die *subjektive Einheit* des Bewusstseins S. 139 或は die

empirische Einheit des Bewusstseins S. 140 と同意味に用ひるに到つて愈々明瞭に看取し得る處のものなのである。之に反して後者は、內感の形式たる時間は「あらゆる現象一般の先天的制約である、しかも內部現象(我々の心の)の直接の制約であり、正にそれによつて間接には更に外部現象の制約でもある」S. 50 と規定された場合に認められ、しかして演繹論の內に於て「我々の表象はいづこより生じ來れるものにもせよ、なほ心性の變狀として內感に屬する、しかして我々の認識は凡てかくの如きものとして結局は內感の形式的制約卽ち時間に從屬してゐる」A. S. 98. 99. と語られる事によつて極めて明瞭に讀みとらるゝ處のものなのである。しからば內感に關する此の二つの異る規定は、相互に、又、純粹統覺に對して如何なる關係に立つであらうか。

我々は一應此等の二つの規定を內感に關する心理的規定、及び先驗的規定として特色づけ得るであらう。けだし經驗的統覺と同一視された內感は、單に「經驗的にして、常に轉變する」A. S. 107. ものであり「表象の聯想に依る一つの現象に關はり」S. 140 從つてその研究は「先驗的哲學には屬せずして、心理學に屬する」S. 153 からである。之に反して外感をも間接には包括する內感は「あらゆる綜合判斷の Medium」であり「そこに於てあらゆる我々の表象が含まれてゐる總括、卽ち內感及び內感の先天的形式

卽ち時間」S. 194 と呼ばれる處のものとして、對象認識可能の根源をなし、正に先驗的哲學の一要素を形成するからである。かくして內感に關する心理的なる規定と先驗的なる規定とは一應互に區別せられなければならないであらう。カントは「あらゆる經驗可能の制約を含む三つの根源的なる源泉がある、……卽ち感官、想像力、及び統覺である……。此等の能力は皆な經驗的なる使用の外に尙ほ先驗的なる使用を有してゐる、先驗的なる使用は單に形式に關はり、先天的に可能である」A. S. 94 と語つて、我々の認識能力については經驗的使用と先驗的使用とを區別すべき事を述べてゐるからである。

しかしながらかかる區別はあくまでも維持さるべきであらうか。カント認識論の特長は存在的なるもの(卽ち心理的なるもの)と意味的なるもの(卽ち先驗的なるもの)とが互に孤立せしめられずして、寧ろ內面的に結合されてゐる點に存するのではなからうか。卽ち意味的なるものは存在的なるものに對して形式の位置に立ち、存在的なるものは、それに對して內容の意味を有つのではなからうか。その事は、先に引用せる箇處に於て「先驗的なる使用は單に形式に關はる」A. S. 94 と記るされてゐる事より推して察せられやうが、更に「經驗一般及びその對象認識の可能がそれに基

く三つの主觀的なる認識の源泉がある、感官、想像力及び統覺である、そのいづれも經驗的に、卽ち與へられたる現象への適用に於て考察せられ得るが、しかし又いづれも、それ自らかゝる經驗的使用を可能ならしめる先天的なる基礎であり、又要素である」P. S. 115. の如き句よりして是認さるべきものであらう。けだし經驗的なる認識能力の作用する場合には、その形式として何等かの程度に於て、既に先驗的なる能力が作用してゐる譯であり、實にかゝる「先天的なる基礎」に基いて經驗的なる使用が可能とされてゐるからである。從つてカントに於ては先驗的なるものは單に經驗的なるものゝ實現すべき理想ではなくして、むしろ經驗的なるものゝ地盤をなし、根柢であり、基礎たる所の形式であり、本質であるのである。從つて內感の先驗的なる規定とはその經驗的なる規定の本質を示すにすぎないのである。いかなる經驗的なる內感も、それが內感たる限り既に先驗的なる形式を實現し、その形式に於てあるのである。時間はカントによつて內感の形式であると規定されたのであるが、一定の內容に於て限定された時間は經驗的なる意味に於ける內感であり、すべての內容を內に含んでそれを限定する時間は先驗的なる意味に於ける內感ではないであらうか。

以上の如くに內感についての二つの規定を關係せしめ得るならば、そこよりして

我々は更に、內感と純粹統覺との關係をも理解し得るであらう。カントは我々の認識能力について感官、想像力及び統覺の三つを擧げ、しかしてそれ〴〵について經驗的使用と先驗的使用とを區別したのであるが、我々が上に(一〇頁)引用した句より推すならば先驗的統覺に對應する經驗的統覺なるものは、また直ちに經驗的規定に於ける內感と同一視されてゐるのである。之に反して先驗的規定に於ける內感は、凡そ與へられ得べき表象の總括として、あらゆる我の表象に伴ひ得べきであると云ふ純粹統覺と極めて類似する。從つて我々は感官、想像力及び統覺の各々について獨立に先驗的なる使用と經驗的なる使用とを考ふるべきではなくして、寧ろあらゆる經驗的なる使用の根源を、經驗的なる規定としての內感に於て求むべきではないであらうか。元來我々の心的狀態は經驗的には常に內感を通じてのみ與へられ得るのである。內感に於て經驗的なる制約を與へられずしては經驗的統覺なるものも成立しないのである。その意味に於ては心理的なる我は內感につきると言へやう。カントが經驗的統覺と內感とを同一視してゐる理由はこゝにあるのである。しかしながら內感の意味は經驗的統覺たるにはつきない。我々は內感に於てあらゆる表象の總括を有するのである。此の先驗的なる規定に於ける內感の內には既に統

覺への內面的なる結合が見出されるのである。カントも「直觀の統一は……所與の雜多の統覺の統一への關係を含む……, welche〔die Einheit der Anschauung〕…schon die Beziehung dieses letzteren〔des mannigfaltigen Gegebenen〕auf Einheit der Apperzeption enthält S. 144 Anmerk. 事を注意してゐるのである。かくて純粹統覺は內感の內に於て與へられるのではないとしても、少くとも內感と共に與へられるのである事は明となつたであらう。しかしながら內感は直ちに純粹統覺と結合されるのではない。兩者の間には深く陰れたる能力なる想像力が媒介するのである。しからば想像力とは何であるか。

此のカントによつて「魂の盲目なる、しかしながら不可缺の作用」S. 103. と呼ばれた想像力は、一般には、„das Vermögen, einen Gegenstand auch ohne dessen Gegenwart in der Anschauung vorzustellen“ S. 151 として規定された。其は對象の現在を俟たずして、對象を直觀に於て表象し得る能力なのである。從つて想像力は一面に於ては直觀に屬しつゝ他面に於て直觀の受納性を脫して自由なる所に特色を有するであらう。ハイデッガーの云ふが如くに„Diese „bildende Kraft“ ist *zumal* ein hinnehmendes (rezeptives) und ein schaffendes (spontanes), Bilden“. Kant und das Problem der Metaphysik S. 121. なのであ

る。それは受納性にして自發性であり、時間の内にありながら過現未に捉はれず、よく時間に執せざるものなのである。それ故にのみよく直觀と悟性とを媒介し、内感と統覺との媒介たり得るのである。まことに我々は想像力に於て時間を超えて超時間的なる悟性の世界に達するのである。* 凡そ我々の認識は時間の形式に於て與へられた所與が超時間的なる悟性の範疇の下に攝せられる事によつて成立する。しかして想像力は時間と超時間との媒介として「あらゆる認識の根柢に先天的に横はる人間の精神の根本能力なのである。」A. S. 124.

* 私は想像力を時間と超時間との媒介者として理解すべきであると思ふ。卽ち直觀より云へばその悟性化の、又逆に悟性より言へばその感性化の媒介者でなければならない。この點に於てハイデッガーが想像力を時間と同一視する事については直ちに同意し難い。

かくて三つの認識の源泉である感官と想像力と統覺とは、所與卽ち雜多なるものゝ能力である感官と、統一の能力である統覺との中間を占める綜合の能力たる想像力によつて互に媒介されるのである。„……beide aüssersten Enden, nämlich Sinnlichkeit und Verstand, müssen vermittelst dieser transzendentalen Funktion der Einbilbungskraft notwendig zusammenhängen……, A. S. 124 けだし雜多なるものと一なるものとは、雜多なるものが綜

合されて一なるものゝ下に攝せられる事によつてのみ可能なのであるが「綜合一般は……全く想像力の作用である」S. 103. からである。

感官と想像力と統覺とはそれ故一つの意識に融合すると言ひ得るであらう。意識一般とは此の一つの意識に外ならないのである。從つて意識一般は第一に叡知的なる統覺を頂點とし、第二に生産的想像力を媒介とし、第三に內感に於けるあらゆる所與の總括に及ぶのである。「我考ふ」があらゆる我の表象に伴ひ得なければならないと云ふ時に、その意味が既に覗はれる。「我考ふ」は叡知的なる統覺であり、あらゆる表象は內感に於て與へられるのである。而してそのすべての表象が同じ一つの統覺の下に統一され、內感の意味が統覺に於て完成されるが故にのみ同じ一つの意識について語り得るのである。カントが「あらゆる直觀の多樣が統覺の根源的なる綜合的統一の制約の下に立つ」事を悟性の最高原則と考へた S. 136, 137. のもその爲であつたであらう。又、あらゆる所與は唯一なる從つてすべてを統一する普遍的自覺 ein allgemeines Selbstbewusstsein S. 132 の下に立つと考へたのもそのためでなければならない。かくて我々は第二版に於ても第一版に於けると等しく經驗一般に關はる意識が一面感覺的なるものから叡知的なるものに及ぶ三段の綜合を有つと共に、

他面、あらゆる所與の表象を統一する全體的なる自覺である事を知り得た。その點よりすれば超越的意識も意識一般も異る處がない。從つてその限りに於ては意識一般の有つ一般は、叙知的なるものを根柢とし、純粹なるものを媒介として、經驗的なるものにまで達する意識の全體性に成立する事となる。もし經驗一般に對する主觀の側があるならば、其は單に叙知的なるもの、高々純粹なるものに止まる事なく、更に經驗的なるものゝ全體に及び得るものでなければならないが、それこそ意識一般(或は超越的意識)に定められた役割であるべきであらうからである。從つて又經驗一般が單に物一般の叙知的なる、從つて抽象的なる一般でなく、又更に對象一般の純粹なるものとしての一般でもなく、寧ろあらゆる經驗を一般に總括する意味に於て、「一般」であるが如く、意識一般は叙知我としての一般でもなく、又直觀一般としての一般でもなく、あらゆる經驗的なる所與を無限に含み得る地盤としての一般でなければならない。即ち經驗一般が物一般の對象一般を通じての具體化であるが如く、意識一般は叙知我の純粹想像力を通じての具體化であるべきである。その意味に於て意識一般は最も具體的なる一般であるとも云へやう。意識一般が經驗一般に對應すべきものであるならば、それは以上の如き構造を有さなければならないであら

うし、又その一般は以上の如き意味での一般でなければならないであらう。しかしながら注意しなければならない事は意識一般の一般は單に經驗一般に對應するものと考へられた限り、未だ決して直ちに私及び汝、彼等の經驗に對し、それを包括する意味に於て一般なるものゝ意味を有しない事である。經驗一般が私の經驗汝の經驗彼の經驗に對する意味に於て一般的なる經驗ではなく、たゞ却つて一つの自然に關はる經驗の總體を意味した樣に、意識一般もかゝる一つの經驗一つの自然に對應するものとして、私、汝、彼、の意識には本來 indifferent であるべきであらう。それは或は何人かの意識に於て成立し得る意識の總體を意味し得るであらうけれど、未だすべての私、汝、彼の意識の總體は意味しないのである。從つてカントがそれを「普遍的なる自覺」ein allgemeines Selbstbewusstsein S. 132 と呼んでも、その普遍は、たとへばコーヘンが解した如く das persönlich Individuelle に對する意味に於て普遍であるのではなく (H. Cohen, Kants Theorie der Erfahrung S. 417) たゞむしろ個別的なる我の所與の可能的なる全體性の内に見出さるべき普遍性に止まるのである。たゞそれは可能的なる全體性として單に個別的なる我の制限を遊離してゐるのである。それは「全體的なる可能的自覺」das ganze möglichе Selbstbewusstsein A. S. 113 (傍點筆者) にすぎないのである。

かくて經驗一般に對應する限りに於て、意識一般が如何なる意味の一般を有するものなるかは明となつたであらう。即ちそれは超越的意識がしかりしが如く横に、は、我のあらゆる可能的なる意識の全體を包括する意味に於てその地盤をなし、竪に、は、感覺的なるものより叡知的なるものに及ぶ三層の構造を有するのである。感覺的なるものは純粹なるものを通じて叡知的なるものにまで統一されるのである。それは巧みにもカントが擬へしが如く「言はゞ現象を文字に綴つてそれを經驗として讀みとる」S. 370, 371 事を可能ならしむる機構なのである。從つて此の機構の頂點を形成する純粹統覺の統一なるものも量の範疇の意味に於ける統一と解すべきではなくして、却て「質的なる統一」qualitative Einheit S. 131 と解さるべきである。即ち「演劇,演說,物語」の主題の有つ如き統一」etwa die Einheit des Thema in einem Schauspiel, einer Rede, einer Fabel S. 114 であり、經驗を「一つの Kontext たらしむる統一であるのである。カッシーレルの言葉を借りればそれは die durchgängige logische Harmonie を成立せしめる所以のもの E. Cassirer, Das Erkenntnisproblem II. S. 669. とも言ひ得るであらう。從つてこの「論理的なる調和」へと導かれ行く全機構は、感覺的なるものより叡知的なるものに到る三階段に於て互に融合協調すべきであるからして、カントが他の個處に於

て用ひたGemeinschaft der Apperzeption S. 261なる言葉によつて適切に表現され得るのである。かくして意識一般とは我の意識に於ける全體的なるGemeinschaftとして規定され得た。たゞそのGemeinschaftには未だ私、汝、彼、の意識を包括する如き意味の一般性は缺乏してゐる事に注意すべきである。それは私、汝、彼、の意識に對してはむしろ遊離せる構造なのである。

意識一般の論理的なる內容は一應上述せる處を以て盡きるであらう。それは先に超越的意識について論じた以上には殆んど出ないのである。それはまことにあらゆる我の可能なる意識內容の純化統一として最も具體的なる普遍とも言ひ得るであらうけれど、そしてまたあらゆる我の可能なる意識內容の理想的全體として、單なる私、のものと云ふ規定をすら飛躍し得てゐるであらうけれど、未だ個別的なる私、汝、彼、の意識に對してそれを總括すると云ふ意味は認められない。これ等の具體的個別的なる意識に對しては單にそれを遊離せる中性的なる存在とすら言はれなければならないのである。しかしながらそれもむしろ當然であるであらう。何故かならばカントにとつて主として問題であつたのはいかにして一つの自然が認識され得るか、又一つの經驗が可能であるかを明にする事であつた。對象認識に對して

主觀的なる根據を見出す事であつた。從つて我々の意識の內よりして一つの自然に對應し得る機構を見出し得れば充分なのであつて、それが更に他の意識をも包括し得るや否やと云ふ如き事は考慮の外に置かれたからである。カントは個別的なる私、汝、彼、の意識から意識一般にまで到達したのではなくして、一つの不變なる自然に對して一つの不動なる我を見出し得たに止まるからである。その事は次の事を思ひ合す事によつても明であらう。カントは知覺判斷 Wahrnehmungsurteil と經驗判斷 Erfahrungsurteil との區別として、後者には Allgemeingültigkeit und Notwendigkeit des Urteilens を附與してゐるのであるが、こゝに Allgemeingültigkeit と呼ばれてゐる處のものは、單に Allgemeinheit と同一であつて、多くの主觀に對する妥當ではなく、寧ろ法則がその箇々の場合に妥當し、廣く經驗一般に妥當する事を意味するに外ならなかつたからである。カントには多くの主觀への妥當、言はゞ intersubjektive Allgemeingültigkeit とも云ふべきものはなかつたのである。第一批判及び序說に於ては Allgemeinheit と Allgemeingültigkeit とは同意義に用ひられ、共に、Gültigkeit als „hinreichend für alle Fälle" (Prolegomena § 5 であり (H. Ratke Handlexikon S. 8)、卽ち objektive Gültigkeit を意味するに止まつたのである。まことに認識の對象的妥當が問題である場合に、主觀的妥當は問題では

ないからである。論理的なる妥當に際しては主觀的妥當はついに無視され得る。心理的妥當を云々する事は無意味ですらあるであらう。從つて意識一般の內に普遍妥當的なる判斷の根據が見出されても、それは經驗一般に對する意識一般の普遍妥當性が確立されたのみで、未だ決して幾多の個別的なる主觀に對する心理的妥當が成立したのではないのである。

かくて我々は意識一般を一應私の、汝の、或は彼の意識に對する意識一般と云ふ如き意味から引き離した。それは單に超越的意識であり、純粹自我である。經驗一般に對し、一つの自然に對し、一つの經驗に對する一般的なる意識なのである。しからば意識一般はあくまでも個別的なる心理的意識に對して疏遠なるものに止まるであらうか。私にはそうは思はれない。意識一般と云ふ言葉が私には何等かの反對を思はすのである。否、實は超越的意識なるものが既に心理的意識に對して疏遠ではなかつたのである。先に論じた如くカントに於ては經驗的なるものと先驗的なるものとは全く關係を絕した二つの世界ではなくして一つは他の形式であり、一つは他の內容であつたのである。先驗的なるものは經驗的なるものに對して本質で

あり、地盤であるのである。カントに於ける二世界主義はプラトンに於けるが如くイデヤと現象との二つの世界の對立ではなくして、むしろ互に相依り相助くべき形式と內容との二つの要素の結合なのである。ラスクが語つた如く zwei-Weltenlehre ではなくして、zwei-Elementenlehre であつたのである。もししからば我々は超越的意識を經驗的意識の本質と見るべきであり、從つてそれは私の意識の本質であると共に、又、汝、彼の意識にとつても本質たるべきであるであらう。それはたとへ私、汝、彼の意識を總括する意味に於て普遍的ではなかつたとしても、少くともそれ等の意識が意識である限りそれに共通に見出さるべき本質として理解さるべきであつたのである。我々は上來かゝる解釋の萠芽を示しつゝそれを展開する事をさしひかへた。しからばそれは何故であつたらうか。

それは我々がカントの意識一般をば經驗一般卽ち一つの自然、一つの經驗に對應するものとし、對象の側に一つの自然が成立すると共に、それに應じて認識の側に、不動なる一つの我が見られるべきであると考へたからである。それは對象的なる統一を言はゞ認識の側に移動せしめたものに外ならなかつたからである。然しながら意識一般の意味は單に對象の相關 Korrelat たるにつきるであらうか。意識一般

の有つ一般性は經驗一般の有つ一般性以上に出る事は出來ないであらうか。我々が上に私、汝、彼の意識の本質と解し得べき萠芽と呼んだものは、それを發展せしめ得ないであらうか。

まことに我々はカントに於て交錯する二つの方向を區別しなければならないであらう。けだしder Transzendentalismus の方向とder Subjektivismus の方向とは互に異るからである。*カントが範疇の演繹について客觀的演繹と主觀的演繹とを區別したのはそのためである。S. XI. ただカントは主觀的演繹よりも客觀的演繹に重心を置いたのである。S. XI. 我々が上に意識一般をば客觀的方向から理解し、一つの經驗に對應するものとのみ考へたのはその限りに於て是認さるべきであらう。

*その點については例へばSiegfried Marck, Die Lehre vom erkennenden Subjekt in der Marburger Schule, Logos IV. S. 365 參照。

しかしながらカント認識論の特長はそれが單に認識の對象をのみ論じたのではなくして同時に對象の認識にも深き洞察を與へてゐる點に存する。意味と存在とが越え難き溝渠によつて遮られずに、互に融合してゐる點に存する。なるほど超越的なるものに重心が置かるべきであらうけれど、主觀的なるものにも、それによつて抹殺されざる獨自の意味が認められたのである。卽ち意識一般は單に規範的、意味

的なるものではなくして、本質的、存在的なる意味を有さなければならない。かくの如き事は可能であらうか。

かくの如き解釋を我々に可能ならしむるものは、一つは意識一般と云ふ言葉そのものであり、他の一つは意識一般或は超越的意識の頂點をなすと我々が解し來つた純粹統覺と云ふ言葉である。

我々は上來純粹統覺をば意識一般の構造の頂點をなすものとみなし來つた。しかしながらカントはいづこに於ても明白に兩者の關係をかくのごときものと規定してゐるのではない。否むしろ兩者は殆んど同意義の言葉として用ひられてゐる如くである。しかして一應それは當然であるであらう。けだし感官、想像力、統覺の三者は互に無關係のものではなくして、同じ一つの根本的なる綜合の能力の現はれであり、言はゞ一つの自覺の種々なる程度とも言ふべきであるからである。從つてこの三つの綜合は發展の窮極に於ては一つの統覺にまとめ得るであらう。それ故分解すれば感官、想像力統覺の三段に分れ、一點に收斂すれば統覺となるとも云ひ得よう。かくて純粹統覺をば殆んど全體的なる意識一般と同一視する事も可能であつたのである。たゞ我々は統覺と云ふ言葉をカントが主として感官、及び想像力に

對して用ひてゐるに對し、意識と云ふ言葉にはかゝる差別がなき故に、意識一般(及び超越的意識)をば全體的なるものと解し、純粹統覺をばその三層の構造の頂點をなすものゝ意味に使用したのである。しからばこの意味に於て純粹統覺とは如何なるものであらうか。

純粹統覺とは「我考ふ」の我である。それは、あらゆる我の表象に伴ひ得べき思惟である。自發性であり叡知的なるものである。從つてそれは叡知的なるものとしての一般性を有さねばならないであらう。元來純粹なるものとは、カントに於ては、あらゆる感覺的なるものを除去した處のものと規定されてゐる。しかるに感覺的なるものが個別化の原理であるが故に純粹統覺は我々の個別的經驗的なる統覺について、その個別性偶然性を除去した殘餘として、正に我々の統覺の本質でなければならない。純粹統覺は我々の經驗的統覺と關係なき彼岸の叡知體ではなくして、却つて我々の統覺の本質であり、地盤でなければならない。すべての經驗的統覺が統覺である限り、そこに實現されてゐる統覺一般 eine Apperzeption überhaupt S. 143 でなければならないのである。從つて又かゝる統覺一般の有つ一般性は、次のヘーゲルの解釋より敎へらるゝ如く抽象的なる普遍に止まらなければならないであらう。ヘ

ーゲルは云ふ。Kant hat sich des ungeschickten Ausdrucks bedient, dass *Ich* alle meine Vorstellungen, auch Empfindungen, Begierden, Handlungen u. s. f. *begleite*. Ich ist das an und für sich Allgemeine, und die Gemeinschaftlichkeit ist auch eine aber eine äusserliche Form der Allgemeinheit. Alle anderen Menschen haben es mit mir gemeins m, Ich zu sein, wie es allen *meinen* Empfindungen Vorstellungen u. s. f. gemeinsam ist, die Meinigen zu sein. Hegel, System der Philosophie, Glockner's Ausgabe B. 8. S. 75.「カントが我はあらゆる我の表象及び感覺欲望行爲等に伴ふと云ふ表現を用ひた事はまづい。我は自らにおいて自らに對して普遍である。しかるに共通性は普遍性の一つの形式ではあるけれど外的なる形式に過ぎない。あらゆる他の人々も私と共通に我であると云ふ事を有つ丁度すべての私の感覺表象等に私のものであると云ふ事が共通である樣に。」他の人々も私と等しくそれ〴〵我であるのである。我はすべての人に共通なのである。しかしかゝる意味に於ける共通性は單に普遍性の外的なる形式にすぎない。卽ちそれは抽象的普遍に止まるのである。

我々は以上に於て純粹統覺をば抽象的普遍として規定した。しかしながら我々は同時に純粹統覺をば經驗一般に對應する最も具體的なる普遍とも考へてゐたの

である。從つて純粹統覺は一面に於て抽象的普遍でありながら、他面に於ては具體的普遍でなければならないであらう。卽ち最も具體的なるものでありながら同時に最も抽象的なるものであり、最も豐富にして最も空虛でなければならないのである。その矛盾はどこから生ずるのであらうか。自然に對する限り純粹統覺には最も具體的なるものと云ふ意味が屬してゐたにも拘らず、他の人間に對した時には最も抽象的なるものとなつたのである。それ故に、同じく普遍と呼ばれても自然に於ける普遍と人間に於ける普遍とには抽象と具體との關係に於て大なる差別があるのでなければならない。はたしてしかるか。この同じ問題が意識一般についても當然我々を待ち迎へてゐるのである。

„Bewusstsein überhaupt.“ 私達は此の言葉を常に「意識一般」と讀んで殆んど怪しみを感じない。しかしながら「意識一般」と讀む事が實は既に問題となり得るのである。例へば私はフィヒテに於て Bewusstsein überhaupt を「意般一般」なる獨立の成句と見るよりは「意識は一般に」と讀むべき箇處のあつた事を思ひ起す。又次のコーヘンの句の如き „Die Apperzeption ist der Herd des Bewusstseins. Wie sich alle Anschauung zum innern Sinne verhält, so alles Bewusstsein überhaupt zur reinen Apperzeption. H. Cohen, Kants Theorie der

Erfahrung. S. 436—437.「あらゆる意識一般」と讀む事は誤解の危險を含むが故に「あらゆる意識は一般に」と讀む事を妥當とするであらう。否カント自らに於ても„Aber das Reale, was den Empfindungen überhaupt korrespondiert in Gegensatz mit der Negation=O, stellet nur etwas vor, dessen Begriff an sich ein Sein enthält und bedeutet nichts als die Synthesis in *einem Bewusstsein überhaupt*. S. 217 及び Beide bisher geführten Beweise waren transzendental, d. i. unabhängig von empirischen Prinzipien versucht. Denn obgleich der kosmologische eine Erfahrung überhaupt zum Grunde legt, so ist er doch nicht aus irgend einer besonderen Beschaffenheit desselben, sondern aus reinen Vernunftprinzipien in Beziehung auf *eine durchs empirische Bewusstsein überhaupt* gegebene Existenz geführet und verlässt sogar diese Anleitung, um sich auf lauter reine Begriffe zu führen. S. 641—642. (イタリックは筆者)の二つの箇處に等しく見出される ein empirisches Bewusstsein überhaupt なるものは獨特なる存在を有つ「經驗的意識一般」ではなくしてむしろたゞ「任意の經驗的意識一般」にすぎないのである。もしからば所謂「意識一般」なるものも單に「意識は一般に」であるのではなからうか。その疑惑を明にするために「意識一般」と云ふ語の見出される箇處を例擧しよう。

Diejenige Handlung des Verstandes aber, durch die das Mannigfaltige gegebener Vorstellungen,

(sie mögen Anschauungen oder Begriffe sein) unter eine Apperzeption überhaupt gebracht wird, ist die logische Funktion der Urteile (§ 19). Also ist alles Mannigfaltige, sofern es in einer empirischen Anschauung gegeben ist, in Ansehung einer der logischen Funktionen zu urteilen bestimmt, durch die es nämlich zu einem Bewusstsein überhaupt gebracht wird. K. d. r. V. S. 143.

Wir werden daher Erfahrung überhaupt zergliedern müssen, um zu sehen, was in diesem Produkt der Sinne und des Verstandes enthalten, und wie das Erfahrungsurteil selbst möglich sei. Zum Grunde liegt die Anschauung, deren ich mir bewusst bin, d. i. Wahrnehmung (perceptio), die bloss den Sinnen angehört. Aber zweitens gehört auch dazu das Urteilen (das bloss dem Verstande zukömmt). Dieses Urteilen kann nun zwiefach sein: erstlich indem ich bloss die Wahrnehmungen vergleiche, und in einem Bewusstsein meines Zustandes, oder zweitens da ich sie in einem Bewusstsein überhaupt verbinde. Prolegomena § 20.

Es geht also noch ein ganz anderes Urteil voraus, ehe aus Wahrnehmung Erfahrung werden kann. Die gegebene Anschauung muss unter einem Begriff subsumiert werden, der die Form des Urteilens überhaupt in Ansehung der Anschauung bestimmt, das empirische Bewusstsein der letzteren in einem Bewusstsein überhaupt verknüpft, und dadurch den empirischen Urteilen

Allgemeingültigkeit verschafft;..... Prolegomena § 20.

Ich sehe also den Begriff der Ursache, als einen zur blossen Form der Erfahrung notwendig gehörigen Begriff, und dessen Möglichkeit als einer synthetischen Vereinigung der Wahrnehmungen in einem Bewusstsein überhaupt, sehr wohl ein;..... Prolegomena § 29.（ゲシュペルトは筆者）

意識一般と云ふ言葉の見出さるゝ箇處は此の四つを以て盡きる。そこでは「意識」Bewusstsein と「一般」überhaupt と云ふ二つの語は無造作に結合されてゐるのではなくして或は「私の狀態に於ける意識」と對せしめられ、或は知覺判斷に對し經驗判斷に普遍妥當性を與へる根據として獨特なる意味を與へられてゐる。我々が意識一般を經驗一般に對應するものと考へた理由もこゝにあつたのである。それはもはや「意識は一般に」ではなくして「意識一般」でなければならない。經驗一般に對する具體的普遍でなければならない。

しかしながら意識一般の有つ一般性はあくまで經驗一般に對する具體的普遍たるにつきるであらうか。「經驗意識一般」が任意の經驗的意識であつた樣に、意識一般も任意の意識一般ではないであらうか。我々の意識から孤立した超越的なる意識一般ではなくして、我々の意識の內にあり、我々の意識の本質をなす意識一般ではな

からうか。一般にいかなる意識も意識である限りかゝる構造を有つものとしての意識一般ではなからうか。少くとも我々は言葉の上に於ては意識一般を規範意識としてゞはなく、本質と解する可能と權利とを有するのである。マンハイムが「黑人にもせよヨーロッパ人にもせよ中世の人にもせよ現代人にもせよ、すべての人に存在すると假定され得る具體的なる人間の意識の總ての層を蒸餾したもの」K. Mannheim, Ideologie und Utopie S. 139 と意識一般を規定してゐる事は強ち荒唐な事でもないのである。意識一般と云ふ言葉は言葉の上からしては、すべての意識から疏遠な彼岸的な意識ではなくして、却つて具體的なる意識の內に含まれ、その本質をなす共通なる意識でなきかを思はすのである。元來カントに於ては überhaupt と呼ばれた處のものは、構造の地盤をなし、本質をなすものゝ謂であつた。對象一般、直觀一般、經驗一般と云ふ如き語がその事を敎へてゐる。從つて意識一般を單に經驗一般に對應するのみのものと見、その限りに於て具體的普遍と見る事は、意識一般の全貌を覗ふ所以ではなくして、それは同時に多くの個別的なる意識に對する本質としても解されなければならない。しかして個別的なる意識の本質としては、意識一般は抽象的普遍に止まらなければならないのである。しかしながらもとより意識一般には

經驗一般に對するものとして、あらゆる經驗を包括する具體的普遍たる意味が失はれたのではない。從つて我々は次のごとくに言はなければならない。意識一般は最も具體的でありながら最も抽象的である。客觀への關係に於ては具體的普遍でありながら主觀相互の關係に於ては抽象的普遍にすぎないのである。それは自然の全體をつゝむではあらうけれど人間の全體をつゝむものではない。意識一般は個別的なる人間の意識に對してはそれをつゝむ具體的普遍ではなくして單にそれ等すべてに通ずる本質として抽象的普遍にすぎないのである。同じ事態を我々は純粹統覺に於ても有した。自然に對した際に最も豐富なものも人間に對した場合には最も空虛なものとならねばならない。それは何故であるであらうか。具體的普遍として見られた意識一般が更に高き立場に移されて抽象的普遍として異る側面から見なほされなければならなかつたのは何故であらうか。

けだしそれに答へるものは、人間の世界の暗さであり、深さであり、又その豐さである。自然をのみ對象とする我はいかに深められ擴大され、超越的意識にまで達しても、尙ほ自らの內から他の個人を引き起す事は出來ない。自然をのみ對象とする限り、我は單なる我に止まるのである。大自然を自らの內に包容し得ても尙ほ呼びか

くべき汝を有さない。我は無限大なる自我としても限りなく孤獨である。然しながら我は本來孤獨ではない。汝に對し、彼に對し我は初めて我なのである。我は人間の間に於て人間なのである。自然に對しては我は未だ眞に人間ではない。自然に於て人間がなるのではない。人間の間に自然が成立するのである。こゝに全自然を掴み得ても、しかしてその限りに於て具體的普遍に達し得ても、尙ほ超越的意識が純粹統覺として抽象的普遍の意味を有さねばならなかつた理由があるのである。この事態は意識一般に於て一層明であらう。まことに單なる自然には誤謬はない、單なる自然に不完全と名づくべきものはない。誤謬と不完全とは人間の世界に到つて初めて現はれ來るのである。從つて意識一般と云ふ言葉が、不完全なる「我の狀態の意識」に對し或は不充分なる知覺判斷との關係に關して用ひられてゐると云ふ事は、それがもはや單に自然を對象とする限りに於て考へられてゐるのではなくして、他の人間との關係を潛在的に含んでゐるのである事を證明するに足るであらう。誤謬と不完全とのある處に人間があるのである。しかしてこの人間の缺點こそ、自然を越えての人間の豐饒さを語るものでなければならない。まことに我と汝と彼との世界、總じて社會的歷史的なるものは自然の限りなき全體をも含めて尙ほ一個

の抽象と化せしむるに足る豊さを含むものなのである。自然に對する限り最も具體的なる普遍と考へられた意識一般が、人間との關係に於ては抽象的普遍に化せねばならなかつた理由はこゝにある。カントが主として具體的なる意味に解し得べき超越的意識と云ふ言葉の代りに不用意に抽象的なる意識一般と云ふ言葉を用ひた事は、純粋理性批判を以ては盡し得ざる人間の歴史的社會的存在の存する事を語るものではなからうか。

意識一般は自然に向けられた人間の一面を打ち破つて、人間に向けられた人間の一面を語る言葉でなければならない。(完)

(之は幾多の訂正と補充とを含むべき未定稿である。識者の示教を賜はらば幸である)